

書評 『ドクター・サーブ 中村哲の15年』

パキスタンとアフガニスタンでハンセン病患者と難民の診療に従事する福岡市出身の医師中村哲氏の足取りを、彼を国内から支援するペシャワール会の活動や現地の人々の暮らしの様子なども織り交ぜながら描いている。

中村氏自身にも現地からの報告として三冊の著書があるが、第三者の筆で写し取られた中村氏の像が氏自身の文章から得ていた印象とは微妙に異なるところが興味深い。つまり氏の人間臭い一面がよくとらえられていて、氏を知る人によれば「これもまた彼の実像に近い」らしい。

中村氏の母は作家火野葦平の妹で、その母の腕に「勉命」と夫の名を彫った入れ墨があつたなど、氏の著書には書かれていない私的な話題も紹介されている。著者はあとかぎで、中村氏を突き動かしているものが何かを突き止め得なかったと悔やんでいるが、氏自身がすでに書いている。「こんなところに生まれなくてよかったと割り切ればそれまでだが、私はどうしてもそれができなかった。(『ペシャワールにて』と。このような感じ方をする人が世の中にはまれにいる。『花と龍』に描かれた母方の祖父玉井金五郎の任侠の血がこの医師の体にも流れているのだろう。

